

ひきこもりカウンセラー

中光雅紀 (なかみつ・まさのり)

福岡県大野城市 「ふぉーむ北辰」 代表

官民連携のサポート体制

福岡県大野城市では、昨年二月から市総合福祉センター内に週一回、ひきこもり相談窓口を開設しています。開設当初より大野城市内はもとより、近隣からも多数の相談者が訪れています。相談者の多くは、当事者が一〇代後半から二〇代の子どもをもつ保護者の方で、三年から長くは一〇年を超すひきこもりを続けているケースもあります。

これまで、「ひきこもり」に対する具体的な相談窓口といったものがなく、そのことがひきこもりの長期化を招いたことは否めません。精神保健福祉センターや保健所といった行政サイドでも、一昨年厚生労働省より「社会的引きこもり」対応ガイドラインが配布されたものの、当事者が窓口に来られない場合に関しては、具体的な対応ができていないのが実情です。私の所では自宅への訪問カウンセリング、啓蒙活動として三か月ごとのシリーズ講演会により、

子防策を含み「どこの家庭にも起こりうる現象」との警鐘を鳴らし続けています。

長期化の要因は

ひきこもり家庭へのカウンセリングにあたっては、まず状況の整理を行います。家庭内暴力が起こっている場合や、病理性が窺える場合、家族間でもかなりの期間コミュニケーションがとられていない場合など、

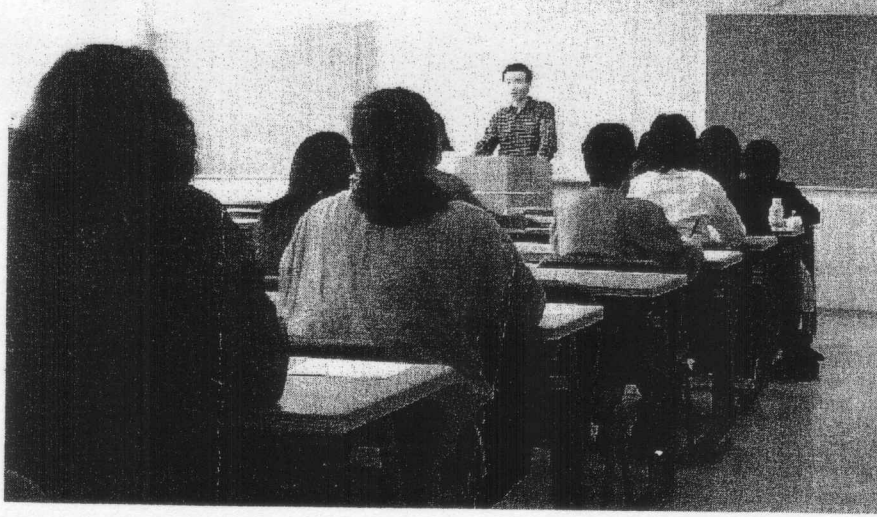
継続された事態に状況判断が著しく困難な状態となっていることがしばしばです。特にひきこもっていることが「通常」となっている生活が出来上がってしまった場合、「何が問題か？」という本質的なことが不明瞭になっています。保護者が「ひきこもり」を子ども自身の問題とだけ受け止めてしまっていると、多くの場合長期化します。同時に親自身が、ひきこもりの子どもをもつ親である自分たちの問題という認識に立ち得れば解決の糸口が見つかるのです。また、わが子が「ひきこも



中光雅紀さん

る」という状態をどう見ているか、その視点が重要になります。「どう見るか」で「どう接するか」の姿勢が変わり、それによって、子どもの状態が違ってきます。つまり「期待効果」です。病気と見れば医療機関での治療という対応を取るでしょう。何かの訴えとすれば、積極的に子どもへの声に耳を傾けるでしょう。身悶えるほどの苦悩の叫びを病と片づけられてしまえば、子どもはその期待の通り病理を演じます。

自立するために



講演中の中光さん

「ひきこもり」は病気ではないのかという問いに対しては、もちろんそうではないとばかりは言いきれません。治療を要する統合失調症や強迫神経症の症状を呈している場合もあります。しかし、ひきこもりという行為そのものの多くは「治療」を必要とするのではなく、「訓練」を必要とする状態です。病気とは言ってしまえないものの、心身ともに不健康であることは確かです。不健康な状態からより健康な状態をつくるためには、心のリハビリ（心の筋力強化）が必要となります。

成育過程の途上、両親からの愛情をもらいそこなった、もしくは、受け取りそこなったことにより愛着欲求（抱擁される欲求）が歪められ、ぬくもりを乞い、心かき乱された状態がひきこもりという現象だと思えます。彼らにとって、愛されなければならぬ必要性があるのです。愛されていないことへの絶望感は、やがて怒り、憎悪、怨念へとすりかえられ、深い悲しみは心の奥底へ抑圧、

封印されてしまい、本人にもその行動の意味がわからぬ象徴的行為が、決して得られぬ充足感を空しく求め続ける「終わりのなき闘争」として繰り返されるのです。「子宮」へ還り再誕を願うひとつの象徴が、閉ざされた部屋への「ひきこもり」であると言えるでしょう。

フロイト（精神分析学者）は、「健康な人間にできることは、愛することと働くこと」と喝破しました。まさに愛することと働くことが困難となっているひきこもりの不健康さから脱するためには、「各^{おの}其^の志を遂げ、人心をして倦^うまざらしめんことを要す」（五箇条の御誓文）です。生きがいのある目標をもち自分らしく生きる。生かされてこそ癒されるのです。

強制から共生の子育てへ

仕事を通して青少年たちから教えられることがたくさんあります。親の愛情がいつしか強制・支配・侵入となり、自分たちの期待に沿った状

態でのみ愛するといったコントロールに、子どもは窒息します。互いが相手の立場、個性を尊重し生かし合う共生の生き方「ノーマライゼーション」（Normalization）が実現することで、本来の親子の絆がよみがえります。

ドア越しの返答のない会話に自身の無力さを感じながらも、語り続けていくことで彼らの自己回復力（蘇生力）を目の当たりにし、共に成長できる喜びを感じています。

「地球は未来からの預かりもの」という言葉がありますが、その未来を担う青少年たちの健全な発育、成長を促す場としての「家族」のあり方を多方面から考察していくNPO「日本家族トラウマ援護協会」を組織し、ひきこもりへの対応だけではなく、自己喪失感から社会との適応に消極的になっている青少年、成人への支援を今後行っていきます。これからも愛することと働くことができるように青少年たちへの後押しを続けていきたい、と考えています。